

---

# 皇帝陛下の猫

縞白

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

皇帝陛下の猫

### 【Nコード】

N7812S

### 【作者名】

縞白

### 【あらすじ】

享年二十六歳。短くも長い一生を終えた「私」は、なぜか記憶を失うことなく次なる世界へ降り立った。そこは魔術と科学が混在する戦乱世界。見おろせば我が身は機械人形。製作者である魔術師から「皇帝陛下に忠実であれ」と命じられ、私は東方を支配する帝国皇帝へ献上される。（残酷表現が多く出てきます。流血描写等が苦手な方はご注意ください。）

## 第一話「試作機の零」(前書き)

残酷表現が多く出てきます。流血描写等が苦手な方はご注意ください。

## 第一話「試作機の零」

享年二十六歳。

短くも長い一生を不慮の事故によって終えた私は、なぜか記憶を失うことなく、気がつけば次なる世界へ降り立っていた。

そこは魔術と科学が混在する戦乱世界。  
見おるせば我が身は機械人形。

しかも何故か、戦闘型の自律式機械人形。

頭の中には既にこの世界についての知識と多種類の武器を扱う戦闘術、製作者たる魔術師エーデルシュタイン博士の情報が入れられ、絶対に守らなければならない二つの規則が定められている。

製作者の命令には必ず従い、命令以外の動作をしてはならない  
製作者の命令に従っている状態でのみ、自律機能の維持を許可する

つまりは「製作者に絶対服従せよ」という事だ。  
アイザック・アシモフの小説に登場するロボット三原則より単純

だ、というのがそれを理解した時の感想である。

その他には、「命令以外の動作をしてはならない」などという規則を入れるくらいなら自律式になどしなければ良いのに、と不思議に思った。

嗅覚と味覚と痛覚が無く、表情を変化させる機能も無い機械人形という器に、私の意識はさほど時間をかけずなじんだ。

飲食も睡眠も排泄も必要無く、壊れた部分を修理すれば半永久的に動作する金属製の身体に宿っているという現状は、微睡みに見る泡沫の夢のようだった。

どうも、ただ甘いだけの夢ではないらしいが。

人間の娘として生まれ、鷹揚な両親のもとで「元気でいてくれればそれで良い」と自由気ままに育てられた前世とは違い、今生では既に存在理由が定められていた。

「あなたはわたしの作った試作機です。これから皇帝陛下へ献上する正式な作品を製作する為の、手伝いをしてもらいます」

「わたしの言葉が理解できたら返事をしなさい」と命じられ、私は初めて声を出した。

「はい、博士」

それは記憶にある自分の声とはまったく違う、まだ幼い子供の声色素の抜けた白髪と、奇妙なほど澄んだ琥珀色の眼をしたエーデルシュタイン博士は、ひとかけらの表情も無いシワだらけの顔で「よろしい」と頷いた。

× × ×

老齡の博士は仕事熱心で、私の身体が正常に機能していることを確認すると、様々な試験で能力値を測定した。

私は博士の命令に従って動きながら、今生での自分の身体が性別の無い子供の姿をしている事と、人間を軽く超える運動能力を持っている事を理解する。

そうして試験を受けるなかで、痛覚が無い為か、身体の限界が解からず腕や足や関節を壊しやすい、という事も学んだ。

特に指の破損率が高く、足の親指や小指を失った事に気付かないでいると、うまく体勢が維持できず転んでしまう。

「ふむ。正式な作品を製作する時には、身体の管理機能を強化すべきですね」

博士は手元の紙に何かを書き付け、部品交換が面倒だから身体を

壊さないよう力を制御しなさい、と命令した。

私は「はい、博士」と答えた。

命令された事だけをする生活は私に適していた。

何よりも存在理由が定められている事が、私を安堵させた。

鷹揚な両親のもとで生まれ育った前世、なぜ自分が今ここで生きているのか解らず、家族を愛してはいたものの、ただ生き続けなければならぬ事に息苦しさを感じていた私にとって、エーデルシュタイン博士が迷いなく下す命令は心地良いものだった。

その命令に従っている時、私は定められた存在理由の為にあり、必要とされているのだと感じられた。

そして命令が無い時、一切の動作を止めた機械人形の中で、私の心は己の役目を果たしている者だけが味わえる充足感にひたった。

x x x

数か月かけて研究所での試験が行われた後、私が己の身体となった機械人形の能力と耐久限度を把握した頃に、試験場所が変わった。

ゲート

門と呼ばれる大型の魔道具を使った空間転移の魔術によって、研究所から遠く離れた所へ移動。

かつては交易で賑わう街だったという戦場を見おろす小高い丘の上、帝国の紋章付きの天幕の一つへ入ると、そこで待っていた博士の助手から周辺地図を渡されて記憶せよと命じられた。

機械人形の頭は記憶力に優れているというか、一度見れば忘れるという事がない。

地図を見て覚えましたと報告すると、別の助手が来て銀の皿にそそがれた水に魔術をほどこし、今度は水面に映し出された男の顔を記憶せよと命じられた。

「これがビスマスの將軍です。行つて首を取つてきなさい」

「はい、博士」

味方から攻撃されないよう左の上腕に帝国の紋章付きの紅い布を結びつけられ、右手に標的を狩る為の大きなナイフを持たされた私は、黒煙立ち昇り、爆音轟く戦場へ飛び込んだ。

嗅覚や気温を感じる能力が無い為かやや現実感に欠けているが、ここが危険の多い場所である事は確かだ。

人より遙かに頑丈な機械人形の身体でも、極度の損傷や重要な部位の破損で機能停止してしまうので、物陰に隠れながら周囲に注意して進む。

博士の命令に従つて動く身体の中で、ふと、思った。

機能停止は今生での私の死。

けれど機械人形の機能停止が、人の目に“死”と映る事は無いだ



ろう。

瓦礫の山を越えていくつも屍の横を通り過ぎ、ようやく最前線へ辿り着くと、私の腕に結ばれている紅い布を見たビスマスの兵士から攻撃された。

中距離にいる間は銃やボウガンで、近距離へ行くと剣や奇妙な形をした斧で。

前世では逆上がりさえできなかったが、現在の私の身体は動体視力も運動能力も人外級。

弾丸も矢も刃も軌道を見極めて避け、兵士たちの間をすり抜け、物陰に隠れながら標的を求めてひたすらに疾駆する。

小柄な身体が幸いしたのか、誰にも捕らえられない事無く軍の奥深くまで侵入すると、兵士達に囲まれて馬上から指揮をとる将軍を見つけた。

瞬間。

ナイフを構えて機械の身体を低く沈め、力を溜めて跳躍。

凄まじい勢いで跳んだ私は、すれ違う瞬間に標的の首を刎ねた。

唐突に噴出する血を浴びて將軍の周辺にいたビスマスの兵士達が驚愕し、混乱の悲鳴をあげる。

私は血飛沫の届かない場所へ着地して空を見ると、將軍の首が落ちてくる位置を見極めてもう一度跳んだ。

空中でそれを受け止めると潰さないよう注意して片腕に抱き、着地すると同時に再び走り出す。

誰かが何かを叫ぶ声を背に、身体を壊さない程度に全速力で走り、博士の元へ戻った。

博士は帝国軍の中で一番大きな天幕の下にいて、高位の軍人らしき男が猛烈な勢いで怒声を浴びせるのを、いつもの無表情で聞き流していた。

私は速度を落とし、博士の横顔を見つめながら近付いていく。

博士は助手に耳打ちされてこちらを振り向くと、私の片腕に抱えられた標的の首を見て一言命じた。

「戻りました、と報告しなさい」

「はい、博士。戻りました」

「よろしい」

命じられるまま答える私と、何でもない事のように頷く博士を、先まで怒鳴っていた軍服の男が化け物を見るような目で凝視している。

私は博士の指示で彼のそばにある机の上へ首を置き、ナイフを助手に渡した。

「では、我々は研究室へ戻ります」

博士が言っただけで歩き出すのに、それまで声もなく私たちを見ていた軍服の男が「待て！」と大声で止めた。

立ち止まり、無言で振り向いた博士に、私を指さして男が問う。

「それは一体、何なんだ！」

私は何なのか？

博士はどう答えるのだろう。

耳を澄ませて待っていると、低くしわがれた声は淡々と答えた。

「戦闘型の自律式機械人形の試作機。それ以上でも、以下でもありません」

「馬鹿な！ 自律式機械人形は戦闘に耐えられない、それが常識だ！」

「戦闘に耐えられないのではありません。そうした定説が出来上がるほど、過去に作られた物が戦闘に耐えうる機能を持たなかっただけの事です。」

しかし、技術は進歩するもの。その進んだ技術によって、わたしは戦闘型の自律式機械人形の開発に成功したのです。

そこにある首は、その証拠だと思いませんか？」

男は博士の言葉がまったく気に入らない様子で、ふん、と荒々しく鼻を鳴らした。

「たった一度の成功で早合点しない事だ、博士。その人形も、いずれ原因不明で壊れるだろう」

×  
×  
×

西の王国と東の帝国。

その周辺に小国が乱立し、小競り合いや戦争を繰り返す。

敵は星の数、戦場は常に近くに。

そんな世界で、私は戦場へ連れ出されて数十回の“試験”を受けたが、壊れはしなかった。

三回ほど指揮官たちの首を取ると顔が売れてしまったらしく、どこへ行っても相手が私を警戒し、姿を見られると最優先で攻撃されるようになったのには困ったが。

今のところ幾度か身体の一部を破損しただけで、行動不能や機能停止にまでは至らず済んでいる。

そして行く先々で奇異なものを見る視線を受けながら、博士は標的の首を持ち帰る私に「よろしい」と頷き、渋面の軍人たちの目前にそれを置かせた。

博士は私に様々な命令を下して細かに情報を収集し、必要量が蓄積されたと判断すると、それを活用して正式な作品の製作にとりか

かった。

私は博士が設計図を引くのは別の部屋で助手から全身点検を受け、彼から軽度の損傷は自分で修理するようにと言われて、その方法を教えられた。

この世界の知識や多種類の武器を扱う戦闘術は組み込みであるのに、肝心の己の身体についての知識が欠けている、というのは考えてみれば不思議な事だったが、質問を許されていない私に訊くすべはない。

助手の言葉を聞き、自分の身体の修理法を学んだ。

数カ月後、一体目の作品が完成した。

博士は成人男性の姿をしたその機械人形を「こちう壺號」と呼び、私を「ゼロ零」と呼ぶようになった。

私は与えられた名の通り“存在しないもの”となり、博士の研究室の片隅に置かれた硝子製ガラスの円筒型容器カプセルに入れられ、保存液に抱かれて眠りについた。

平和な世界で幸福に暮らしていた前世の記憶の隣に、今生で命じられるまま殺した名も知らぬ人たちの顔があり、手が彼らの首を刎ねた時の感覚と腕に抱いた時の重みを思い出している。

ぷかり、ぷか、と浮かんでは消えていくそれらを眺めながら、夢うつつに聞こえてくる研究所の人々の声に耳を澄ませていた。

完成から数日後、壱號が壊れた。

原因は戦闘術についての試験中に起きた事故による重度破損。しかし、なぜ頑丈な機械人形が致命的に破損するほどの事故が起きたのか、その理由は不明なようだ。

博士は珍しく声を荒げて怒りを露わにしたが、数時間で落ち着きを取り戻し、次の作品に活かすべく失敗原因を考え始めた。

数日後、博士は次の作品を作り始めた。

壱號より長い時間をかけて制作された「弐號」<sup>にう</sup>は、順調に試験を終えて戦場へ連れて行かれ、穴だらけの金属の塊と化して戻ってきた。

博士は苛立ち、手に触れた紙すべてを破り捨てるなどして荒れたが、また数時間で落ち着きを取り戻すと、次なる作品の設計図にとりかかった。

寝食を削り、命を捧げるようにして博士は作品を作り続けた。

そうして作られた“作品”たちは、どうしてかすべて、壊れ続けた。

「参號」は壹號とは違う試験中の事故で重度破損し、「肆號」はどうしてか起動せず、「伍號」は戦場での初試験で破壊され、「陸號」はまた試験中の事故で重度破損。

「漆號」はようやく戦場での初試験を突破したが、研究所に戻って数時間と経たないうちになぜか機能停止してしまい、それきり動かなくなった。

「捌號」は試験中の事故で重度破損、「玖號」は戦場での試験を易々と突破したが、標的以外の人間を大量に殺した上に味方である帝国兵にまで刃を向けた為、博士が緊急時用に設定していた鍵言葉キイ・ワードを使って強制的に機能停止させた。

「拾號」は戦場での初試験で破壊された。

博士は七体目以降、動かない金属の塊を見ても怒らなくなった。

× × ×

拾號が壊れて十数日後、円筒型容器から保存液が抜かれ、私は何年ぶりにか外へ出された。

博士は私の全身点検をしながら、しわがれた声で言った。

「零。あなたはなぜ今、ここに在るのでしょうか？」

試作機にすぎないあなたが壊れず、なぜ全力を尽くした作品たちがことごとく壊れるのか。どれだけ考え続けても、答えが見つけれません」

それぞれが宿した魂の影響ではないかと思っただ、発言を許されていない私には答えられない。

しかし、それでかまわないのだろう。

博士は私の脚から齒車を一つ取り出して窓から差し込む陽射しに当て、目を細めて角度を変えながらその金属部品を見ると、近くに置いてあった布を取って丁寧に拭きながら言葉を続けた。

「あなたが試験を易々とこなし、実戦にも耐えうる事を十分に証明してくれたおかげで、わたしは戦闘型の自律式機械人形の製作難度をひどく見誤ってしまったようです。

これはわたしの感覚的なもので、何ら根拠のない仮説ですが。

おそらく壊れた十体の人形たちの方が正常で、壊れないあなたが異常なでしょう」

壊れた彼らの方ではなく、壊れない私の方が異常？

よく理解できないでいる私の事など気にもとめず、博士は話し続ける。

「先人の残した言葉にはそれなりの理由がある。故に「自律式機械人形は戦闘に耐えられない」事にも理由があり、わたしはそれを機



能が戦闘に耐えうるものではなかったからだと判断した。

しかし、その考えは間違いだと、十体の機械人形が証明している。ならば正常であるが故に壊れた彼らと、異常である為に壊れないあなたはどこが違うのか、それを探るのが次の道。

そう、思っていたのですが」

脚の歯車を戻し、それを磨いていた布を机に置くと、エーデルシュタイン博士は不機嫌そうな顔で言った。

「あなたを皇帝陛下へ献上する事にしました」

## 第二話「皇帝陛下の猫」

いくつかの部位に稀少金属<sup>レアメタル</sup>を使い、魔力を高純度に精製、さらに高密度に凝縮させた魔石を動力源とする機械人形の製作には、莫大な金がかかる。

私の身体の製作者であるエーデルシュタイン博士は、東方を支配する帝国の皇帝陛下に認められた優秀な魔術師であり研究者だったが、莫大な額の帝国の金を注ぎ込んだ機械人形の製作に十回も失敗した為、進退窮まっていた。

と、いうのは立場的な話であり、研究にしか興味のない博士自身は、自分の評判がどれほど落ちようとまったく気にしていなかったのだが。

そんな博士でも、資金提供を止められるのは困るようだ。

皇帝陛下から直々に「今後も研究を続けたくば何らかの成果を見せよ」と命じられ、何らかの成果さえ見せれば今後も帝国の援助を受けて研究が出来る、という言外の言葉に一考して、今、唯一動いている私を献上する事にしたい。

「これよりあなたの主は皇帝陛下です。忠実にありなさい」

博士は最後の命令を下し、私の身体に組み込まれた規則を書き換

えた。

帝国皇帝の命令には絶対服従

帝国皇帝に従っている状態でのみ、自律機能の維持を許可する

「命令以外の動作をしてはならない」という一文が外された事で、私はようやく自律式らしく動けるようになった。

しかし、命令された時にのみ動くという生活に慣れてしまっていたし、「命令に絶対服従」する為には自由に動き回る事など許されないので、さして何も変わらなかった。

博士は皇帝陛下に仕えるのならば必要だろうと、私の知識に対暗殺者用の戦闘術と、武器だけではなく日常生活で使用される道具を使った戦い方、その他、宮廷作法や貴族名鑑などを追加。

身体の部品もいくつか、より耐久性に優れた物へ換えた。

そして、数日後。

豪華な謁見の間で、私は皇帝陛下に献上された。

「それが戦闘型の自律式機械人形か。エーデルシュタイン、なぜ子供の姿にした？」

「深い意味はありません。これは試作機として製作しましたので、素材を無駄に使わず済むよう小型にただけです」

「それだけの理由で美しい子供の姿をした殺戮人形を作るのか。幾

多の戦場へ行き、醜悪なものなど見飽きたと思っていたが。お前の頭の中だけは見たくないものだな」

「お言葉ながら、陛下。これがどのような人形となるかは命令する人間しだいです。何も命じなければ、これが自ら生き物を屠る事などありません」

「ほう？ 命じる者の意思を映す、鏡だと申すか」

玉座に在るのは他者を従える事に慣れた壮年の男性。

低い声には聞く者の心を引き寄せる力があり、その眼差しには強烈な威圧感がある。

皇帝陛下はエーデルシュタイン博士から私へと視線を移して問うた。

「機械人形、名は何という」

「はい、陛下。零と呼ばれております」

「零？」

この名は気に入らないようだ。

博士がそれは仮名ゆえ、いかようにもお呼び下さいと言うと、皇帝陛下は側近に一人息子である皇子を呼ばせた。

暫くして現れた皇子殿下は、父皇帝によく似た顔立ちの落ち着いた少年だった。

皇帝陛下は彼に、「この人形をお前に与える。名を与えよ」と命じた。

少年は私をじっと見つめてから、言った。

「では、わたしはこれを“猫”と呼びます」

「猫だと？　それが名だと言うのか」

「はい。この眼は猫のような形をしていますから」

機械人形は主の命令に絶対服従する。

その点で言えば猫より犬と呼んだ方が相応しいだろうに、皇子は眼の形だけで私の呼び名を「猫」と決めた。

私はふと、前世でアビシニアンという種類の猫を飼いたいと思っていた事を思い出した。

母が動物アレルギーだった為、猫も犬も最初から飼えないと諦めていたのだが、ある時何気なく読んでいた雑誌でアビシニアンの写真を見て一目惚れし、いつか飼いたいと思ったのだ。その願いに手を伸ばさないでいるうちに前世は唐突に終わり、今に至るのだが。

皇帝陛下は跡継ぎである皇子を不思議そうな目で眺めてから「ふむ」と頷き、奇妙な名を受け入れた。

「猫。これより後は、我が息子に仕えよ」

「はい、陛下」

私はそうして、皇太子殿下の“猫”となった。

x x x

皇太子殿下は賢いが故に気難しい、動物好きな少年だった。

見事な漆黒の毛並みをした大型の狼犬ザードを常に傍らに置き、鋭い爪を持つ鷹を可愛がり、人々からは一定の距離を取る。

私は動物ではないが、皇帝陛下直々に与えられたせい、あるいは“人でないもの”として分類されたのか、側にある事を許された。皇太子殿下は一日とかわらず私の使い方を理解した。

気難しくも優秀な皇太子殿下は侍従や侍女たちを困らせる事などほとんど無く、数十人の家庭教師たちから毎日様々な学問を習って過ごしていた。

しかしどうにも優秀すぎるらしく、鋭い質問で家庭教師たちを口ごもらせるのが日常茶飯事。

その上、言葉を選ばず考えた事をそのまま口にして質問攻めにするので、家庭教師たちは答えられない自分のなんと愚かで知識の浅い事かと自信を失って嘆きながら、短期間で城を去っていくのが常だった。

そうして日が経つごとに皇太子殿下のそばには穏やかで優しい人間など寄りつかなくなり、必然的にとても独特で癖の強い者達が集まってきた。

皇太子殿下は個性的な人物を好むらしく、彼に友人と認められた人々には奇人や変人と呼ばれる者が多かったが、皆それぞれに得意分野を持つ天才や秀才や努力家でもあった。

皇帝陛下は時折、公務の合間に皇太子殿下の元を訪れ、息子の友人の顔ぶれの多彩さにおもしろい連中を見つけたものだなど笑った。

残念ながら、私には笑う機能も余裕もなかった。

皇太子殿下の側仕えとして、彼の奇人変人な友たちが巻き起こす騒動の数々に、否応無く翻弄されるはめになったからだ。

特に魔術師のクォーツは毎回ひどい騒動を起こす厄介な少年だったので、彼が魔術の実験の失敗に皇太子殿下を巻き込んで行方不明にした時、私は排除しておくべきものであると判断してその首に手をかけた。

寸前で皇太子殿下の乳兄弟である近衛騎士のオルブラントに止められてしまったのだが。

殿下の友人たちは癖も強ければ悪運も強い者ばかりで、殺されそうになってもなかなか死なないのが共通した特徴だった。

幸い、皇太子殿下が転移させられたのは帝都の内で、賢い彼は身に付けていた最高級の衣服を目立たない平民の物に替え、ついでに小金を入手して自力で城へ戻ろうとした所をガードに発見され、狼犬の後を追ってきたオルブラントと私に保護された。

ちなみに城でのんびりと待っていたクォーツは、「やあ、お帰り」。小旅行は楽しかったかい？」と笑顔で迎えたところを皇太子殿下に命じられた私の手によって捕まえられ、縄でぐるぐる巻きにさ

れて城で一番高い塔の上から逆さに吊された。

「んぎゃー！」と情けない悲鳴をあげるクォーツに、「良い機会だ。わたしがお前に反省という言葉を叩き込んでやろう」と言った皇太子殿下は、意外にもそれなりにこの突発的な外出事件を楽しんだらしく、整った顔立ちには珍しく笑みが浮かんでいた。

まだ幼い皇太子殿下の、穏やかとは言えないがそれなりに平和な日々。

私は時折、警備をすり抜けてきた暗殺者を捕えたり、友人に手引きされて密かに城下へ遊びに行く皇太子殿下を影から護衛したりしながら、その成長を見守る。

それは数年続き、やがて終わった。

× × ×

「猫、部屋で休め。お前も共に戦場いくさばへ行くのだから、今夜のうちに入念に整備しておけよ」

かろうじて青年と呼べないこともない程度に成長した皇太子殿下は、初陣を明日にひかえて緊張しているらしく、いつもより口数が



多かった。

未だ戦乱の続く世界の東方を支配する大国の次期統治者として、  
軍の手綱を取る事は必須。

皇太子殿下は幼い頃から書物や軍の練兵場でそれに必要な事を学んでいたが、「実践無き知識に価値無し」という考えを持つ皇帝陛下が、先月十五歳になってようやく成人を迎えた跡継ぎの息子へ出陣命令を下されたのだ。

この世界は随分前から各地で戦乱が繰り返され、国境線がころころ変わっているのだが、今回、まだ幼さの残る皇太子殿下が行くよう命じられたのは、南方にある同盟国の応援である。

その国は大きな河を挟んで西隣にある国から突然攻め込まれ、首都まで侵攻されそうになるのに慌てて助けを求めてきたらしい。

香辛料や珍しい鉱石の取引などで昔から親交のある同盟国だった為、皇帝陛下は要請に応じて軍を動かす事を決め、その将として皇太子殿下を選ばれた。

今の私は皇太子殿下の猫だ。

何があるかと彼が行く所へともに行き、その側にいて仕えるだけ。

「はい、殿下」

命じられるまま部屋から下がり、整備部品が置いてある自室へ戻って身体の点検をしておこうとした。  
その、途中。

「あなたが猫さん？」

今までに聞いたこともないほど美しい声に呼び止められ、振り向いた瞬間にその声の主が黄金の髪と瞳を持つ美女である事に気づき、さっと廊下の端へ移動して片膝をついた。

神の愛娘。

地上の女神。

黄金の薔薇。

人々から尽きることのない称賛の言葉を捧げられるこの絶世の美女は、皇帝陛下の妻であり、私が仕える皇太子殿下の母である。

皇太子殿下のお産で体調を崩された為に長く離宮で静養されており、私は今まで一度もお姿を拝見したことはなかったが、噂に聞いた称賛の言葉はどれもただの世辞ではないと一目で解った。

成人を迎えた息子がいるとは思えないほど若々しく美しい、たおやかな女性だ。

皇后陛下は片膝について深く頭を垂れた私に立つよう命じ、子供の姿をした機械人形に、穏やかな眼差しで微笑みかけた。

「あなたの事は、皇帝陛下からお聞きしています。わたくしたちの息子のそばにいて、ずっと守ってくれていると」

感謝していますよ。

優しい声で言われるのに何と答えるべきか解らず沈黙していると、皇后陛下は気にしたふうもなく小首を傾げて、唐突に訊ねた。

「猫さん。あなたがお生まれになったのは、いつごろ？」

なぜそんな事を訊かれるのかさっぱり解らなかったが、答えなければならぬ。

研究所で身体が製作され、目覚めてから博士の元で過ごしたのは、だいたい八年ほど。

それから皇太子殿下の猫となり、七年。

「十五年ほど前です、皇后陛下」

そういえば皇太子殿下の年齢と同じ稼働年数だな、と思いながら答えると、皇后陛下はどうしてか嬉しそうな笑顔を浮かべていきなり私を抱きしめ、何かを祝福するように体温のない額へ口づけを落として言った。

「ああ、やっぱりあなたね。待っていたの、ずっと待っていたのよ」

意味不明だったが、相手は皇后陛下で、周りには側近と近衛騎士たちがいる。

私はたおやかな腕の中で、ただ解放されるのを待った。

幸い、皇后陛下はすぐ腕をといてくれた。

そして。

「あなたがどうして機械人形の身体で現れたのかは解らないけれど、神の御業にはすべて深い理由があるもの。きつと、あなたが今のあなたでなければならぬ理由があるのでしよう。

人の身にすぎないわたくしたちにできるのは、ただ祈ることだけ

……

ああ、猫さん。猫さん、どうかずっとあの子のそばにいてね。あなたさえいれば、あの子はきっと大丈夫だから」

また意味不明な事を言つて、雲の上を歩くような足取りで私の前を通り過ぎ、側近たちを廊下へ置いて一人で皇太子殿下の部屋へ入つていった。

初陣を明日にひかえた息子の為に、わざわざ遠く離れた離宮から帝都まで出てきたのだろうか。

そう考えるとごく普通の母親のように思えるが、さすがは“地上の女神”。

たいへん浮き世離れた方だった。

そんな感想を抱いて、不思議なものを見る目で私を眺める皇后陛下の側近たちに背を向け、自室へ入る。

それが皇后陛下のお姿を拝見した、最初で最後の時だった。

×  
×  
×

翌日、帝都の民の盛大な声援を受けて出立した皇太子殿下の初陣は、予想外の方角へ転がった。

彼が同盟国を支援して侵入してきた隣国の軍を追い払っている間に、突然帝国の周辺が騒がしくなり、同時に幾つもの争いが起きたのだ。

帝国は軍を出して争乱を鎮めようとしたが、そうして人が出払い、警備が手薄になった帝都が空から急襲された。

西の大国、王国の空挺部隊による襲撃。

帝国の周辺で連続した争乱は、帝都の兵を削る為に巡らされた王国の策略によるものだったらしい。

遠く離れた地で状況がうまく掴めず苛立っている皇太子殿下に、伝令兵が悲鳴のような声で最悪の報せを伝えたのは夕暮れ時の事だった。

「皇帝陛下、崩御！ 皇后陛下も共に逝かれたと……！」

皇太子殿下の顔から、幼さが削ぎ落とされた。

その日の夜。

月も星も見えない闇の空の下、煌々とかがり火の焚かれた野営地の中心で、これからどうするのかと深刻な顔で囁き合う兵士たちを集め、彼は言った。

「これよりは我が帝国皇帝である」

敵は王国

帝都を荒らし

我が父母たる先代皇帝と皇后を殺した愚か者どもを

一人残らず踏み潰す

さあ、兵士たちよ

我に続け

帝国は王国を喰らい、大陸の覇者となろうぞ！

燃えさかる炎に照らされて爛々と輝く男の眼が兵士たちに狂気的な熱を与え、絶対的強者として傲慢なほどの自信に満ちた声が強烈に彼らの心を捕らえる。

自分たちの居ない間に家族や妻や恋人のいる故郷を荒らされた男達は怒りに燃え、若き皇帝に従った。

それが西の王国対、東の帝国。

二つの大国が正面衝突するという、かつてない大戦の始まり。

私は“皇太子殿下の猫”から“皇帝陛下の猫”となり、彼の傍らでその行く末を硝子玉の眼に映す事となる。

### 第三話「異国の機械人形」

王国兵を蹴散らして帝都を取り戻すと、亡くなられた皇后陛下を王国の者達が連れ去ったと、その時城にいた生き残りが報告した。

それを聞いた老年の貴族達が、王国の国王が帝国の皇后に昔から執着していたのがこの戦争の発端だったのだらう、と噂したのが民の間にまで一気に広がり、侍女達の噂話で知った私は「異世界版トロイア戦争か」と理解した。

どんな世界であっても、人間がいれば同じような事が起こるものらしい。

幸か不幸か、民は仲睦まじい皇帝夫妻の妻に横恋慕して二人を殺した王国国王、という話に激しく怒り、それに影響されて兵士達の士気も上がった。

国内から王国兵を駆逐して追わず、一時の安定を作り出した皇帝陛下は、貴族達を先代皇帝の葬儀と自分の戴冠式を行うという言葉で呼び集め、軍が整う時を待ちながら彼らと会して国内の基盤を固めた。

そして今こそその時だと思極めると先代皇帝の葬儀を行い、その後の戴冠式で正式に皇帝の座に就いた事を国内外に広く知らせ、王国へ宣戦布告。

自ら軍を率いて西へ赴く。



大陸の中央では準備万端に整えられた王国軍が既に待ち構えており、帝国軍の到来によって東西の二大国が激突する戦が始まった。

そこで。

皇帝陛下は、戦場へ出る事を望まれた。

彼が大国の最高権力者になっても遠慮しない友人たちは、「皇帝が最前線に出て大ケガするか死んだらどうするんだよこのド阿呆！」などと口々に叫び、なかには力ずくで止めようとした者もいたが、彼には絶対服従する機械人形がいる。

両親を殺された怒りにとりつかれている友人の無茶を、力ずくでも止めてやらねばと努力した冷静な思考の持ち主達は、皇帝陛下に命令された私の手で退けられた。

これは止められん、と早々に悟った友人たちは、怒り心頭している皇帝陛下をどうにかして守るべく、謀略を巡らせたり魔術と科学を駆使して高性能な兵器を造ったりするなど、それぞれの得意分野で手を打ち始める。

皇帝陛下は彼らの行動が自分の邪魔にならなければ、好きなようにせよと放置した。

そして、皇帝陛下は戦場に立つ。

剣を抜いて軍を指揮する彼の側に在るのは漆黒の狼犬ガードと、

子供の姿をした戦闘型の自律式機械人形、猫。  
その周りを取り囲み、幾重にも守ろうとするのは癖の強い友人一  
同。

“東方の大国”と呼ばれるに相応しいよく鍛錬された兵士を率い、  
奇抜な策略や一瞬で地形を変える魔術兵器にも恵まれた若き帝国皇  
帝は、瞬く間に王国の領土を攻め落として占領していく。

その快進撃を支えた人々は、『奇謀のクォーツ』や『鉄壁のオル  
ブラント』などと呼ばれて英雄と称えられ、帝国軍の士気は天井知  
らずに上がっていった。

交戦中の軍にとって士気が高いのは良いことである。

しかし、将は兵たちのように今日の勝利だけを喜んでいるわけに  
はいかない。

遠征の疲れなど吹き飛ばすほど高い士気で満ちた野営地の奥、一  
番大きな天幕の下で、皇帝陛下は気難しげな顔をして机上に広げら  
れた地図を睨む。

その側にいるのは今回の遠征に随行している宰相補佐官と魔術師  
『奇謀のクォーツ』の他、数人の将官。

皇帝陛下は両親を殺され上に母を奪われた事について今も激怒し  
ているが、王国の首都を落として完全制圧した後、占領した領土の  
統治が己の責務になると誰に言われずとも承知している。

占領後の統治を望ましい形で行うには、交戦中である現在から先  
を見越した配慮をしておく事が必要不可欠だ。

ただ両親を殺された怒りに支配されるばかりではなく、統治者として未来を見る目を持つ皇帝陛下の邪魔をしないよう、私は闇夜にまぎれて彼を狙う暗殺者たちを秘かに葬り、その戦闘で損傷した身体を軍に随行するエーデルシュタイン博士の助手に修理してもらった。

× × ×

大陸全土を巻き込む二大国の戦は、三年で終結した。その勝者となった帝国は、西の王国を喰らうのとともに周辺の小国もすべて飲み込み、大陸全土を支配する覇国となった。

しかし、王国の国王は最後まで降伏せず、徹底抗戦。

帝国軍にも甚大な被害が出て、私も最終決戦の最中、国王の近衛騎士団団長バルファスの攻撃で行動不能に陥る損傷を受けた。

一応、向こうにも左目を潰す程度の攻撃を当てたのだが、そこで行動不能となって後はただ、血まみれの顔を手で覆って吼える男が仲間の騎士達に連れられて逃げてゆくのを、王宮の床に転がって見ている事しかできなかった。

そしてかつてない重度の損傷を受けた私は早々に帝国へ戻され、

エーデルシュタイン博士の元へ運び込まれた。

行動不能に陥った私の姿を見た皇帝陛下が、ひどく青ざめた顔で「誰か今すぐ猫を直せ！」と怒鳴った声がずっと、身体の中にこだましていた。

台の上にのせられた私に新しい脚を取り付けながら、エーデルシュタイン博士が言った。

「あなたは相変わらず、問題なく機能しているようですね」

私が作られてから十八年は経過している筈なのに、色素の抜けた白髪も奇妙に澄んだ琥珀色の眼もシワだらけの顔も、博士の方こそ不可解なほど変わらない姿でいるような気がしたが。

私は「はい、博士」と答えた。

暇だったのかそういう気分だったのか、博士は手を動かしながら珍しく独り言をこぼした。

「子供の姿をした戦闘型の自律式機械人形など、皇帝陛下は気に入るまいと思っていたのですがね。よもや皇太子殿下に与えられ、難しいと評判の彼に気に入られて何年もお側に置かれる事になるとは。」

すぐに疎まれて研究所へ戻されるだろう、というわたしの予想は見事に外れましたよ。あなたに関しては考えが当たらない事ばかりで、まったくもって苛立たしい」

博士は私の事を研究するのを諦めたわけではなかったらしい。

とりあえず“研究の成果”として献上しておき、私が皇帝陛下に疎まれて研究所へ戻されたら、また研究するつもりだったのだ。

時が過ぎる事を忘れたかのように何も変わらない博士よりも、少年から青年へ、皇太子から皇帝へと変わっていった現在の主を見ている方がおもしろいので、私としては幼き皇太子殿下に気に入られたのは幸運な事だった。

けれどそれは、製作者であるエーデルシュタイン博士を嫌っているという意味ではない。

研究熱心なあまり研究所の一部と化している老齢の博士、迷いなく私に命令を下し、機械人形の性質を誰よりもよく理解している彼を。

私はたぶん、昔から好きだった。

私の好悪など、気にするどころかそれがある事さえ誰も知るまいが。

修理を受けながら、私はふと、いつになく饒舌な博士に訊ねた。

「博士。私が異常である事は問題ですか」

「問題です」

即答してから、博士は片眉を上げ、私が自分から質問した事にすこし驚いた様子を見せたが、またすぐに常の無表情に戻って言った。

「あなたは単体で見れば何も問題ありません。

しかし、あなたを元にして製作した機械人形たちがすべて半年と

もたず機能停止している事を考えると、あなたを正常とは言えない。  
人はそれを“異常”と呼びます」

あなたは歯車が正確に噛み合っていないのに正常に機能する機械  
人形。

何故あなたが正常に機能しているのか解らない。  
わたしには解らない。

だからこそ、知りたい。

皇帝陛下が「早く猫を戻せ」と催促したらしく、エーデルシュタ  
イン博士は翌日から数名の助手とともに研究室に籠もりきりで私を  
修理した。

私は数日がかかりでほとんど全ての部品を取り換えられ、「わたし  
の元へ帰る時を待っていますよ」と言われるのに「はい、博士」と  
答えて、皇帝陛下の元へ戻る。

綺麗に修理されて元通りの姿で戻った私に、皇帝陛下は腕輪型の  
魔道具を与えた。

鍵言葉として設定された「籠の鳥は眠る」という言葉を唱えると、  
一度だけ鉄壁の魔術結界が展開されるという魔道具だった。

展開される結果は小型だが、お前の身一つ守る程度ならば役に立つだろう。

そう言つて、皇帝陛下は今後、常にそれを身につけておくよう命じた。

× × ×

終戦後、皇帝陛下は王国に連れ去られて綺麗に保管されていた皇后陛下の御遺体を取り戻すと、死してなお美しい母君の葬儀を行つて一つの時代の終わりを宣言し、新たな時代を築くため本格的に動き始めた。

それから三年。

皇帝陛下は二十一歳になられた。

大戦の爪痕は未だ深く残っていたが、大陸がひとつの国に統一された事の影響は大きく、皇帝陛下がすべての民を平等に扱うようにという命令を下すと叛乱を起こす者の数は減少に向かい、各地で交通税を徴収していたかつての国境の関所を廃止すると交易が盛んになった。

その一方、私は元王国近衛騎士団の団長バルファスが地下に潜伏して各地で破壊活動を扇動している事が気にかかり、皇帝陛下に討伐へ行く許可を求めたのだが。

「残党狩りは軍の役目。お前の役目はわたしの側に在る事だ」

即答で却下。

私は「はい、陛下」と答えた。

一年後。

未だ元団長は捕まらず、私は最終決戦の時に仕留め損なつた事を内心後悔していたが、帝国の上層部はそれどころではない様子だった。

皇帝陛下は年をとることに気難しくなっていき、何故か宰相や大臣たちがどれほど「これは皇帝陛下の責務ですぞ」と言っても、妻を娶ろうとしないのだ。

帝国は一夫一妻制で、先代皇帝もそれに従っており、歴代を遡ってみても妻以外の女を囲っていた皇帝の数は片手でおさまる程度しかない。

当然、当代の皇帝陛下も一人の妻しか娶らぬだろうという暗黙の了解のもと、宰相や大臣たちは大陸の覇者の妻にふさわしい女性を求めて各地の情報を収集し、陛下には内密の会議を開いて検討し、選り抜かれた才色兼備の令嬢を推薦していた。



しかし、皇帝陛下はそのすべてを「気に入らぬ」と一蹴。  
「今は忙しい」と、言外に話そのものを拒絶。

後継者を産む正式な妻が必要である事は、皇帝陛下も理解している筈だ。

けれど誰に何を言われても妻を娶ろうとしないので、周囲が奔走する事となる。

結果。

それぞれの思惑によって帝国皇帝の妻を探す宰相や大臣や高位貴族から、地位を気にせず昔馴染みをからかう好機と見た友人たちまで、様々な人が入り乱れて皇帝陛下の周囲に女性たちを送り込んだせいで、城はかつてない大騒動の渦に飲まれた。

皇帝陛下は山積みの執務をこなしながら夜毎迫ってくる多彩な美女たちの相手をする、という日々疲れ、政務がひと段落したところで身を隠して城を出た。

表向きには休養を取る為に離宮へ行かれたとされたが、実際には狼犬ザードと私と二人の臣下兼友人を連れ、気晴らしに北の島国へ渡った。

大陸からだいぶ離れていたおかげで統一戦争に巻き込まれずに済んだそこは、一年の大半を雪で閉ざされるという厳しい風土に育てられた、頑健で穏やかな人々の国だった。

皇帝陛下は身分を隠して旅するのを楽しんでいたが、ある時、私は慣れない大雪の道で転んで崖から落ち、修理しなければ動けない身となってしまった。

損傷したのは下半身で、頭部と胸部は問題なく、両腕も使えるのだが、持参していた整備用の部品だけではとても修理しきれず歩けない。

帝都の研究所へ戻るしかないな、と旅を諦めて国へ帰ろうとした皇帝陛下を、友人たちが止めた。

この国の職人に必要な部品を作ってもらえば良い、と言ったのだ。皇帝陛下は旅を続けたいばかりではなく、今まであまり国交の無かった北の島国の技術力を見る良い機会になると、その言葉に頷いた。

そうして、機械人形など初めて見る、という人々に囲まれ、私は必要な部品を紙に書いたり口で説明したりしてできるだけ正確に作ってもらい、自分で自分の身体を修理する事になった。

静かな島国では珍しいその出来事は噂話によって瞬く間に広まり、暫くすると王城から、異国の機械人形に国王が会いたいと望まれている、という使者が来た。

皇帝陛下は招待に応じ、王城で十代前半の少年と思しき国王と会うと、密かに身分を明かした。

相手が好奇心旺盛で無邪気な少年王だった事が幸運に働いたのか、この島国の人々の気質ゆえの当然の結果だったのか。

身分を明かした皇帝陛下はあたたかく迎えられ、私は王城の鍛冶師に残る部品を作ってもらった事になった。

その、滞在中。

皇帝陛下は少年王の姉君に、恋をした。

#### 第四話「二度目の終わり」

色白でふつくらとした愛らしいその女性は、特に美人というほどの顔立ちではなかったが、どこか浮き世離れた雰囲気は今では亡き皇后陛下によく似ていた。

少年王に頼まれ、ふわふわと雲の上を歩くような足取りで王城を案内する彼女を、幼い頃から仕えている私でも見た事がないような眼差しで皇帝陛下がじっと見つめるのに、友二人は勿論、狼犬のザードでさえ主が恋に落ちたのだと気がついた。

北の島国の第二王女、セラフィーナ。

大陸を統一した帝国皇帝を虜にした、これまでに唯一の女性。

国は小さいが王族だから身分は釣り合う、その他の問題はどうにでもなるから何とかして口説け、と大喜びの友人たちに応援され、様々な口説き文句を吹き込まれ、「うるさい黙れ」と言いつつも皇帝陛下は彼女に好かれるよう努力した。

が、皇帝陛下は普通の生活というものに恵まれていない。

少年期は数多の家庭教師を自信喪失させながら奇人変人と遊び、思春期には軍を指揮して両親の仇を討つついでに大陸を統一し、戦後、遊ぶ間など欠片も無く執務に追われながら青年となり、国がある程度落ち着くと今度は多彩な美女たちに夜毎迫られる、という生

活を日常としてきたお方である。

戦乱とは無縁の北の島国で、穏やかに慎ましく暮らしてきた王女殿下を口説くのに、彼ほど不適切な人物もいなかっただろう。

皇帝陛下は見物人が拍手したくなるほど見事に色々な手順を間違え、言葉選びや行動の選択を誤り、当たり前のように王女殿下に逃げられかけたが、周りの人々の手を借りてなんとか捕まえ結婚の承諾を得た。

あまりに必死な皇帝に同情した天然気味な王女が、「この気持ち  
は恋だわ」と勘違いして承諾しただけではないか、という説もある  
が。

その真偽は王女殿下にしかわからない。

ともかく周囲は皇帝が権力を振りかざして第二王女を奪い去る、  
という結末にならずに済んだ事に深く安堵し、帝国と連絡を取っ  
てどのように婚儀を進めるかという話に入った。

×  
×  
×

帝国皇帝とセラフィーナ王女の華燭<sup>かしよく</sup>の典が行われると、大陸中がお祭り騒ぎになった。

大陸を統一させて長きに渡る戦乱を終わらせた偉大な皇帝の幸福と、その平和を維持する後継者の誕生を願い、多くの民が二人を祝福した。

城では最初、浮き世離れた田舎国の第二王女が超大国の皇后としてやっていけるのかと心配する者達もいたが、彼女はその天然ぶりを遺憾なく発揮して見事に高位貴族たちの慇懃無礼な挨拶を受け流し、目を白黒させている彼らを独特の思考から紡ぎ出す言葉で煙に巻き、皇帝陛下より上手に扱いにくい彼らをあしらった。

しかし、自身ではどれほど上手くそれをこなしたのかまったく理解しておらず、その無邪気さが皇帝陛下を笑わせた。

それは若くして皇帝の座についた彼が、初めて公式の場で見せた本物の笑顔。

妻を得た皇帝が公式の場で笑えるほどに落ち着くと、不思議と帝都<sup>みやこ</sup>が落ち着いた。

その空気はやがて大陸全土へ広がり、着実に復興の進む各地で、亡国の元権力者たちを旗頭に叛乱を起こそうという不穏な気配も、ゆるやかにとかされ消えていった。

そして、一年後。

皇后陛下、ご懐妊の報。

皇帝陛下は誰よりもそれを喜んだが、母親が自分のお産で身体を悪くしたという事情のせいか、同時にひどく心配した。

初めての子だというのに、皇后陛下の方がどつしりと落ち着いており、自分が少々気分を悪くしたただけでおろおろと右往左往する夫を「大丈夫ですよ、あなた」と、のんびりなだめていた。

そんなある日。

皇帝陛下が新しく造られる学舎などの視察の為に数日城を離れる事になり、私は皇后陛下の護衛に残された。

皇后陛下は午後の暖かな陽射しを浴びながら、他愛のない雑談の中で私に訊ねた。

「ねえ、猫さん。私の国では子供と同じ日に生まれた動物を探して子供と一緒に育てる風習があるの。前に陛下にお聞きしたら飼っても良いと仰って下さったから、今から探しているのだけれど。

その子の名前は何か良いかしら？」

問われてぼろりと口からこぼれたのは、前世で飼いたかった猫。

「アビシニアン」

「アビシニアン？ とても可愛らしい、不思議な響きの名前ね」

皇后陛下はその言葉の響きが気に入ったようだったが、現物を見ずに名を決めるのはまったく似合わないものになる可能性が高い、という危険があるので、あくまで候補の一つという事をお願いしておいた。

後年、何故こんな似合わない名前にしたのだと、皇子が皇女からお叱りを受けるのは遠慮したい。

皇后陛下はそんな事は気にしないで良いだろうと笑ったが、普段何も言わない私がお願ひするのを珍しがって、わかりましたと頷いた。

「では、候補のひとつとして覚えておきましょう」

× × ×

のんびりした母親に似たのか、皇帝陛下の御子は十月十日をだいぶ過ぎるのに周囲を青ざめさせておいて、何の問題もなく健康に生まれした。

健やかな赤ん坊の泣き声が響きわたるのに、まるで自分がお産をしたかのように疲れきって土気色の顔になった皇帝陛下は、面会を許されるとふらふらと今にも倒れそうな様子で綺麗に整えられた寝台へ行き、妻の細い手を握ってその無事を神に感謝した。

皇后陛下は意外と元気で、「あら、わたくしも頑張りましたのよ」



とおつとり微笑み、神にばかり感謝する夫をほがらかにからかった。

二人の第一子は男の子で、よく泣き、よく乳を飲み、よく眠る様子に皆深く安堵した。

そして皇后陛下の郷里の風習に従って探された同日生まれの動物は、金色に黒い斑点の散る美しい毛並みの豹。

雄だったので「アビシニアン」では可愛らしすぎるという事になり、別の名が与えられた。

私の出した名前を使えなかった事を残念がった皇后陛下は、「娘が生まれたらアビシニアンと名付けましょう」と宣言し、皇子のお産を思い出したらしい皇帝陛下に「娘はもう何年か後にしておこう」と言われていた。

一年後。

皇帝陛下は二十六歳になられ、一歳を迎えた御子のお披露目に、帝都を馬車で巡ると決められた。

その報せが出されると、帝都には帝国の後継者たる皇子を一目見ようと人々が押し寄せ、皇帝夫妻の婚儀の時のようなお祭り騒ぎが連日繰り広げられるようになる。

人で溢れたその中を、短い距離とはいえ皇帝一家が一台の馬車に乗ってまわるということで、警護担当者たちは安全確保の為に昼夜問わず走り回る事になった。

そうして慌ただしく人々が動く中、準備は着々と進められ、いよいよ当日。

皇帝陛下は皇子を片腕に抱き、皇后陛下を連れて豪華な馬車へ乗り込んだ。

私は馬車の後方を、狼犬ザードの背に乗って付いていった。

見た目より重い機械人形の身体には軽量化の魔術がかけられている為、数日かけて私を乗せる訓練をされたザードは背の上の荷をさして気にせず、軽快な足取りで主の乗った馬車を追う。

そうして皇帝一家の馬車に追従しながら、事前に警護担当者から渡された数十枚の要注意人物の似顔絵の中に、元王国近衛騎士団団長、バルファスの顔があつた事を思い出していた。

機械人形という私の身体に、ほとんど全ての部品を取り替えなければならぬほどの損傷を与えた唯一の人物。

私が左目を潰しながら仕留め損なつた男。

各地で破壊活動を扇動しているという情報を掴みながらも、帝国軍は未だ彼を捕らえられないでいる。

最終決戦の場で見た時よりも頬が痩け、狂気的な顔つきになった彼の似顔絵を手にしてからずっと、妙な胸騒ぎがしていた。

どうやらそれは、前触れだったようだ。

民衆の中から皇帝陛下の馬車の前へ飛び出してきた、一人の男。

数年越しの後悔のおかげか、私はおそらく誰よりも早く「彼だ」と気付いた。

考えるより先に身体が動き、ザードの背から飛び降りると全速力で走ってその身を確保。

以前よりだいぶ細くなった男の腕を掴んで捻りあげると、路上に押し倒して拘束する。

当然、反撃を警戒しながら押さえ込んだのだが、彼はまったく言っていないほど抵抗してこなかったので、違和感を覚えた。

何かおかしい。

騒然となる周囲のざわめきを聞きながら、押し倒された状態で男が奇妙なほど満ち足りた笑みを浮かべるのを見て、身体の奥の歯車が悪寒に震えた気がした。

自分の命を捨てて、皇帝陛下に一矢報いるつもりか。

王国が帝国に敗れて八年。

主君を失い、国を失い、左目を失い、地位や名誉を失っても命までは失わず。

そんな彼がこれまでどうして生きてきたのか私は何ひとつ知らないが、皇帝陛下を害そうというのなら止めさせてもらう。

それが機械人形の身体に組み込まれた命令による判断だったのか、

気付いたら金属の身体の中にいた私という魂の望みだったのかは、自分でも解らない。

ただ、何をすればいいのかは解っている。

バルファスを片腕で拘束したまま、もう片方の手で私を追って傍にきた狼犬の首を掴んで離れた所へ放り投げると、誰も来ないうちに一つの言葉を唱えた。

「籠の鳥は眠る」

八年前から常に私の手首にあった腕輪型の魔道具が起動し、鉄壁の魔術結界が展開される。

皇帝陛下は小型の結界だと言っていたが、私とバルファスを余すところなく包み込めるだけの大きさがあつたので何も問題ない。

私は結界に閉じ込められた事に気付いた彼が驚愕に目を見開くのを眺めおろし、相打ちも悪くないなと思った。

彼が皇帝陛下の命を奪う可能性は、これで消えるのだ。

今生の親である博士の元へ帰れず、彼の研究にほとんど何の協力もできなかったのは残念だが、心配事を一つ無くしてゆけるのだから私にしては上出来な方だろう。

元王国近衛騎士団の、団長どの。

求めた獲物ではなかるうが、皇帝陛下の猫、貴方の左目を奪った私が共に逝くのだから、それで我慢しておいてくれ。

極限まで見開かれた男の目の中で、笑えない筈の機械人形が傲慢な笑みを浮かべたような気がして。

身体の下で凄まじい爆発が起きるのに意識が消し飛ばされる。

それが戦闘型の自律式機械人形へ宿った私という魂の、二度目の終わりだった。

×  
×  
×

ふわふわと、柔らかい何かで全身を包まれている。

涼やかなそよ風が頬を撫でていくのに、ふあ、と身体があくびをこぼした。

すぐそばで誰かが笑い、ささやき合っている。

そしてそつと近付いてきたあたかなものが、どこか懐かしい声で言った。

「はじめまして、アビシニアン。ぼくのかわいい妹」

それが三度目の始まりを告げる声であると、その時の私には知るよしもなかった。



#### 第四話「二度目の終わり」(後書き)

2011年4月30日、完結。ありがとうございました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7812s/>

---

皇帝陛下の猫

2011年5月30日01時04分発行